

第一章 あしらった口に、夜が残る

竈の湯気が、まだ袖に残っていた。

米のとき汁を捨てて、まな板を拭いて、鍋の底を最後にもう一度撫でる。私は花奈乃。十八歳。農家の四女で、花嫁修行のため、新撰組の食事係をしている。明るくして、丁寧にして、残さず食べてもらえるようにする。それが私の仕事だった。

「花奈乃ちゃん」

後ろから、低い声がした。振り返る前に、熱い息が耳の後ろへ落ちる。沖田総司。一番隊組長。病み上がりのように白い顔に、笑うと細くなる目。隊の中では人気者で、私も例外ではなかった。ただし、人気の中身が、少し違う。

「また来たの、沖田さん。昼餉はもう出したでしょう」

「出したよ。でも、花奈乃ちゃんの顔が見たかった」

そう言いながら、沖田さんは私の頬に唇を寄せた。熱い。柔らかい。ほんの少しずれて、耳の付け根まで湿る。私は肩をすくめて、手で押し返す。

「だめです。厨房ですよ。土方さまに見られたら」

「土方さんなら、今は近藤さんと話してる。大丈夫」

沖田さんは笑ったまま、私の尻を掌で包んだ。帯の上からでも、指の形が分かるほど強くない。なのに、布ごしに熱が残る。撫でるように、摘まむように、円を描く。私はまな板に両手をついて、声を殺した。

「沖田さん。触らないでください」

「かわいい。怒ってる顔も、かわいい」

「かわいくないです。仕事中です」

「仕事中でも、かわいいものはかわいい」

私は振り返って、沖田さんの手首を払った。いつもと同じだ。頬にキス、尻に手、かわいい、という三拍子。隊士たちの前では軽く流して、厨房ではもう少し強くあしらう。沖田さんはそれを楽しんでいるみたいに、目を細めて下がる。

「分かった。今夜は我慢する」

「今夜も来ないでください。部屋に入られたら困ります」

「困らせたいわけじゃないよ。花奈乃ちゃんが、僕を困らせるほうだよ」

その言葉の意味を、私は昼のあいだ考えなかった。竈の火を落として、食器を乾かして、廊下を歩いて自分の部屋へ戻る。六畳。布団一枚。窓の外は、京の夜風。帯を解いて、着物を畳んで、湯で濡らした手拭いで顔を拭く。今日も、沖田さんに尻を触られた。今日も、あしらった。それで終わりだと思っていた。

襖が、音もなく開いた。

「……沖田さん」

立っていた。浅葱の羽織を脱いだあとで、白い襦袢のまま。髪が少し乱れて、目だけが真剣だった。いつもの笑いが無い。私は胸元を押さえて、一歩下がった。

「部屋に入らないでください。近藤さんにも、土方さまにも」

「伝えなくていい。今夜は、花奈乃ちゃんに伝えるだけ」

沖田さんは襖を閉めて、鍵はない部屋の内側で、私の手首を握った。熱い。脈が速い。私は引こうとして、引けなかった。

「また、いつもの……」

「いつものじゃない」

そう言って、沖田さんは私の口を塞いだ。

最初は、閉じた唇の上に、熱いものが乗っただけだった。次に、歯の隙間を舌が探る。私は「んっ」と声を漏らして、顎を引いた。沖田さんは顎を指で固定して、舌を深く入れた。上顎を舐め、歯茎を撫で、私の舌を巻き込む。唾液が糸を引いて、顎から落ちる。呼吸ができない。鼻から吸っても、沖田さんの匂いばかり入ってくる。刀と、薄い血と、午後に飲んだ茶の残り。

「は、な……離して……」

「離さない。花奈乃ちゃんが、僕をあしらうたびに、ここまで考えてた」

沖田さんは私を布団の上に座らせて、帯を解いた。襦袢の襟を左右に開く。私の胸が、白い布のあいだから出る。十八歳の、まだ小さいほうの胸。乳首は寒さで立っていた。沖田さんはそれを見て、息を吐いた。

「きれい。昼間、厨房で隠してたんだ」

「見ないで……沖田さん、これは……」

「見る。触る。花奈乃ちゃんが、僕を軽くあしらった罰」

優しい声だった。なのに、指先は容赦ない。右の乳首を、親指と人差し指で摘まむ。乳輪のしわをなぞって、つまみ上げる。左も同じ。両方を同時に、ゆっくり回転させる。私の背中が反った。膝が閉じる。閉じた膝のあいだに、沖田さんの膝が入ってきた。

「声、出しているよ。」

「出さない……出したら、隣に聞こえる」

「じゃあ、小さく。花奈乃ちゃんの小さい声、好き」

沖田さんは顔を下げて、右の乳首を口に含んだ。舌先で先端を弾いて、歯で軽く挟む。吸う。強く吸う。離すときに、乳首が赤く伸びて、唾液で光る。左も同じ。両方を交互に、音を立てて吸う。ちゅっ、ちゅっ、という音が、狭い部屋に残る。私は布団の端を握って、顎を上げた。

「ん……んっ、だめ、そこ……感じる、わからない……」

「感じてる。乳首、こんなに硬くなってる」

沖田さんは指を、私の腹へ滑らせた。腰紐をほどき、裾を左右に開く。下着の真ん中が、すでに暗い色に変わっていた。

沖田さんはそれを見て、笑った。いつもの、細くなる目。

「あしらってたのに、濡れてる」

「濡れてない……湯のせいです」

「嘘。花奈乃ちゃん、嘘つくと、もっと中まで見るよ」

下着を横にずらした。陰毛が少ない私の股が、あらわになる。外陰唇が閉じて、そのあいだから愛液が細い糸を引いている。沖田さんは人差し指で、その糸をすくった。指先を私の目の前へ持ってくる。透明で、粘って、光る。

「見て。これが、湯？」

「見ないで……恥ずかしい……」

「恥ずかしいなら、名前を言って。ここ、なんて呼ぶ？」

「……お、おま……んこ、です」

「いい子。じゃあ、おまんこのどこが濡れてる？」

「わかんない……全部……」

沖田さんは指を、外陰唇のあいだへ入れた。ぬるり、と音がした。中指を添えて、二本で陰唇を左右に開く。内側の、赤い粘膜が空気に触れる。クリトリスが包皮から半分出て、脈打っていた。沖田さんは親指で、包皮を上へずらした。剥き出しのクリトリスに、直接、指腹が当たる。

「ここ。花奈乃ちゃんのクリトリス。昼間、まな板に手をついてたときも、ここ、腫れてたでしょう」

「腫れてない……っ、あ、そこ、擦らないで」

親指が、ゆっくり円を描く。上から下へ、左右へ、時々強く押し込む。愛液が指に絡んで、糸を引く。クリトリスが、擦られるたびに小さく跳ねる。私の腰が、無意識に沖田さんの手へ寄った。

「寄ってきてる。体は、正直だね」

「体が、勝手に……私は、嫌です」

「嫌なら、止めてって言って。止めるよ。ただし、止めたら、明日の朝、近藤さんと土方さんに言う。花奈乃ちゃんと、僕が、こういうことをしてるって」

私の喉が、鳴った。近藤局長。土方副長。帳簿も、厨房の順序も、あの二人の前では嘘がつかない。関係を知られたら、食事係を辞めさせられる。家へ帰される。花嫁修行が終わる。

「……言わないで」

「じゃあ、今夜は、僕の言うとおりにして」

沖田さんは中指を、膣口へ当てた。輪になった入り口が、指の腹を吸う。ゆっくり、第一関節まで入る。ぬるぬるした壁が、指を締めつける。第二関節。根元。沖田さんは指を曲げて、前壁を探った。少しざらついた場所に、指腹が当たる。

「ここ。Gスポット、花奈乃ちゃん、自分で触ったことある？」

「ない……そんな、ところ……」

「今夜、覚える。ここを、こう」

指が、内側から手前へ搔く。短い、速い動き。愛液が音を立てて、くちゅ、くちゅ、と部屋に広がる。クリトリスは親指で押し続けられている。二つの場所を同時に責められて、私の視界が白くなった。

「んあっ……待って、待って、変な……来る、来るっ」

「いっていいよ。一回目は、指で」

膣壁が、指を強く絞った。子宮口の奥が、きゅん、と小さく鳴る。私は沖田さんの肩に顔を埋めて、最初の絶頂を漏らした。短い、浅い、それでも腰が震える絶頂。愛液が指の根本まで溢れて、布団に染みる。

「かわいい声」

沖田さんは指を抜いた。糸が、膣口と指のあいだに三本残る。それを私の乳首に塗って、また口で吸う。塩気と、自分の匂いが、胸の先端で混ざる。

「次は、僕の」

沖田さんは袴を開いた。白い布の下から、すでに勃起した陰茎が出る。包皮が半分剥けて、赤い亀頭が光っていた。裏筋が、脈に合わせて跳ねる。大きさは、私の想像より長かった。私は膝を閉じて、首を振った。

「入らない……そんなの、入らない」

「入るよ。花奈乃ちゃんのここ、さっき指を飲み込んだ。同じ穴だよ」

沖田さんは私の膝を開いて、亀頭を膣口へ当てた。熱い。硬い。ぬるぬるした入り口が、亀頭の形に合わせて開く。沖田さんは腰を、ゆっくり前へ出した。亀頭が、輪を押し広げて、中へ沈む。

「んっ……痛い……張る、張るっ」

「痛い？ 止めるかどうかは、僕が決めるよ」

優しい声のまま、沖田さんはもう一寸、入れた。亀頭が完全に埋まり、裏筋が膣口の輪に擦れる。私の内側が、初めての形に合わせて伸びる。熱い。脈が、沖田さんの脈と重なる。

「まだ、半分」

「半分……そんな、嘘……」

「嘘じゃない。見て」

沖田さんは私の顎を下げさせて、結合部を見せた。私の外陰唇が、白い茎を咥えている。残りの半分が、まだ外にある。愛液が茎を伝って、陰囊まで落ちていた。

「花奈乃ちゃんの穴が、僕のを食べてる。かわいい」

「かわいくない……恥ずかしい、見ないで……」

「見るよ。全部見る。花奈乃ちゃんが、僕をあしらった日数ぶん」

沖田さんは残りの半分を、一度に入れた。根元まで。陰毛が、私の陰毛に触れる。子宮口に、亀頭の先が当たった。深い。内臓を、下から持ち上げられる感覚。私は声を殺して、沖田さんの背中に爪を立てた。

「入った。全部」

沖田さんは動かない。中で、陰茎が脈打つ。膣壁が、その脈に合わせて収縮する。愛液が、押し出されて、結合部から溢れる。沖田さんは私のクリトリスを、挿入したまま親指で撫でた。

「痛いまま？ それとも、痛いに、気持ちいいが混ざってきた？」

「……混ざって、きた、かも……わからない」

「わからないなら、動かして確かめる」

腰が、引き始めた。亀頭が、膣壁を擦りながら出口へ向かう。裏筋が、手前のざらついた場所を通過する。また沈む。角度を変えて、上を向くように入れる。子宮口に、何度も当たる。浅い、深い、浅い、深い。音が、水音になる。ぬちゅ、ぬちゅ、ぱん、ぱん。私の胸が、沖田さんの襦袢に潰れて、乳首が布に擦れる。

「花奈乃ちゃん。言って。今、どこが気持ちいい」

「……奥、当たるところ……と、クリトリス……」

「もっとはつきり。僕の何が、どこに当たってる」

「沖田さんの……おちんちんの、先が、子宮口に……当たってる。クリトリスは、指で……」

「いい子。じゃあ、もっと早くする」

速度が上がった。根元まで入れて、すぐ引く。毎回、子宮口を突く。クリトリスは、挿入のたびに沖田さんの腹に擦れる。私の中で、熱が溜まっていく。二回目の絶頂が、指のときより深く、長く来た。膣壁が、陰茎を絞る。沖田さんは動きを止めずに、その絞りを押し開いて、突き続けた。

「中で、締まってる。花奈乃ちゃん、イってるのに、まだ入れてるよ」

「やめて……敏感、すぎて……っ、また、また来る」

三回目は、重なった。前の波が引かないうちに、次が来る。視界が点になって、耳が鳴る。愛液が、結合部から白い泡になって溢れた。沖田さんは私の耳に、息を落とす。

「僕も、出す。どこがいい。中？ 外？」

「中は……だめ、子どもが……」

「子ども、できても、僕が責任取るよ。でも、今夜は花奈乃ちゃんが選んで」

選ばせる声だった。なのに、腰は止まらない。亀頭が、子宮口に密着したまま、小さく震えている。出す直前の脈。

「……中、は、怖い。でも、外に出されたら、布団が……」

「布団より、花奈乃ちゃんの中のほうがいい。出している？」

「……いい。中に、出して」

沖田さんは、深く沈めたまま、射精した。熱いものが、子宮口に直接当たる。脈ごとに、量が押し出される。精液の匂いが、結合部から上がってくる。私の中が、熱で満たされて、溢れた分が太腿を伝う。沖田さんは抜かない。射精の途中で、また小さく腰を動かして、残りの精液を奥へ送る。

「入ってる。花奈乃ちゃんの子宮の前に、僕のが溜まってる」

「熱い……出てくる、漏れてる」

「漏れていい。漏れた分は、指で戻すよ」

沖田さんは抜いた。精液と愛液の混ざった白い糸が、亀頭と膣口のあいだに残る。開いた膣口から、白いものがゆっくり溢れる。沖田さんはそれを中指ですくって、また膣内へ戻した。子宮口の近くまで押し込んで、そのまま指を曲げて、手前を搔く。

「四回目、行く？」

「もう、だめ……イキすぎ……」

「だめ、は、今夜は禁止。花奈乃ちゃんが、僕をあしらった回数より、少なくイかせない」

指と、残った精液のぬめりで、四回目が来た。短い、甘い、力が抜ける絶頂。私は沖田さんの胸に顔を埋めて、声を囁んだ。沖田さんは私の髪を撫でて、同じ優しい声で言った。

「これから、毎晩来る。拒んだら、局長と副長に言う。受け入れたら、誰にも言わない。花奈乃ちゃんは、どっちがいい」

私は答えられなかった。中に残った熱と、開いたままの穴と、まだ立っている沖田さんの陰茎を見て、喉だけが鳴った。

「……来ないで、とは、言えない」

「言えない、でいい。今夜は、それで十分」

沖田さんはもう一度、精液の残る穴に亀頭を当てた。まだ硬い。私の内側は、もう閉じない。二度目が、静かに始まりかけている。襦の外を、誰かの足音が通り過ぎた。私は沖田さんの背中に爪を立てて、声を殺した。

厨房であしらった口に、夜が残っていた。残った熱は、朝になっても、腿の内側を伝いそうだった。

第2章 拒めば、あの二人に

朝、腿の内側が乾いていなかった。

白い跡が、筋になって残っている。指で触ると、まだ粘る。昨夜、沖田さんが戻した精液が、朝まで穴の縁に残っていた。私は井戸端で裾をたくし上げ、手拭いで拭いた。冷たい水が、開いたままの膣口に当たって、小さく縮む。痛む、というより、形を覚えている。

厨房に立つと、土方さんが帳面を見て通りすぎた。近藤さんも、朝餉の椀を置いて「うまくなったな」と笑った。いつもの言葉なのに、胸が冷える。昨夜のことを、あの二人に言われたら、私はここを出される。花嫁修行は終わる。家では

「京で何をしていた」と聞かれる。答えられない。

「花奈乃ちゃん」

竈の後ろで、沖田さんが米袋に肘をついていた。白い顔。細くなる目。声は、昼の隊士と同じくらい優しい。

「朝、拭いた？ 残ってたら、午後に熱が出るよ」

「……残ってません」

「嘘。腿の内側、赤い。指で擦った跡がある」

私は鍋の蓋を音高く閉めた。他の食事係が、隣の部屋で漬物を切っている。聞こえる距離。沖田さんはそれを知っている、わざと近い声で続ける。

「今夜も行く。襖は開けておいて。閉めてたら、開けるほうの音を、廊下の人に聞かせる」

「沖田さん、昼間は……」

「うん。昼間は、かわいいだけ。夜は、別」

そう言って、沖田さんは私の尻を、帯の上から掌で押した。中指が、割れ目の位置に沈む。布ごしに、昨夜開いた穴の柔らかさを確かめるように。私はまな板に爪を立てて、齒を噛んだ。

「拒否していいよ。その代わりに、局長と副長に言う。花奈乃ちゃんの穴に、僕のが残ってるって。検分されるよ、土方さんなら」

私は答えなかった。答えられないことが、答えだった。

夜。

行燈を消して、布団を敷いて、帯だけ解いて待った。待っている自分が、嫌だった。嫌なのに、腿を閉じると、中がきゅっと鳴る。昨日より濡れている。沖田さんが来る前から。

襖が開く音は、昼間より小さかった。沖田さんは羽織を部屋の隅に置いて、私の前に座った。手を伸ばして、私の顎を上げる。

「口、開けて」

「……何を」

「唾液。昨日のキスより深くする。舌の根まで」

唇が重なる前に、沖田さんの親指が私の下唇を押し下げた。口が開く。舌が入ってくる。昨日より長い。上顎を舐め、歯の裏側を撫で、舌の根を押す。唾液が溢れて、顎から胸へ落ちる。呼吸を鼻だけでするうちに、胸の前が熱くなる。

「手、後ろ」

言われるまま、両手を腰の後ろで組む。沖田さんは私の襟を左右に開いて、乳首を露出させた。昨夜吸われた跡が、淡い赤で残っている。沖田さんはそれを見て、舌でなぞった。乳輪のしわの一本ずつ。先端を歯で軽く引き、離す。伸びた乳首が、弾けるように戻る。

「昼間、竈の前で立ってたとき、これ、着物の裏で擦れてたでしょう。腫れてる」

「擦れてません……」

「擦れてないなら、今夜、倍触る。自分の指で、見せて」

私は組んだ手をほどいて、自分の胸に当てた。沖田さんの目の前で、左右の乳首を摘まむ。つまみ上げて、回転させる。

自分の指なのに、見られていると感度が違う。先が硬くなって、乳輪が縮む。

「ん……自分で、すると、変です……」

「変でいい。花奈乃ちゃんの乳首、自分で摘まんで、僕に見せてる。かわいい」

沖田さんは私の手の上から、さらに強く摘まんだ。爪が、乳輪に沈む。痛みと快感が同時に走って、腰が浮く。下着の真ん中が、すでに黒く変わっていた。

「下着、ずらして。脱がさない。ずらすだけ」

布を横へ寄せる。外陰唇が、行燈の残光に晒される。昨夜より腫れて、隙間から愛液が糸を引いている。クリトリスは包皮から完全に出て、小さく脈打っていた。沖田さんはそれを指で弾いた。軽い。なのに、電流が子宮まで落ちる。

「包皮、剥いて。自分の指で」

私は親指と人差し指で、クリトリスの包皮を上へずらした。剥き出しの赤い粒が、空気に触れる。沖田さんはそれに、唾液のついた指を乗せた。回転しない。押し込むだけ。包皮の下へ、指の腹が沈む。

「ここ、昼間から勃ってた。厨房で鍋を持ったとき、腿を閉じたでしょう。閉じて、擦った」

「閉じてない……」

「閉じてた。僕、見てた。花奈乃ちゃんの腿の内側、着物の裾が濡れてた」

嘘だと思ったかった。本当かもしれない。私は顔を伏せた。沖田さんは伏せた顔を、またキスで上げさせる。舌を入れたまま、下の指を膣口へ滑らせる。中指が、輪を押し開いて入る。昨日より抵抗が少ない。壁が、指の形を覚えている。

「二本」

薬指が並ぶ。二本で、内側を広げる。手前のざらついた場所を、手前へ搔く。短い、速い。愛液が音を立てる。くちゅ、くちゅ、くちゅ。隣の部屋まで届きそうな音。私は齒で下唇を噛んだ。

「声、我慢しない。我慢したら、もっと早くする」

「聞こえる……近藤さんの部屋、近い……」

「近いよ。だから、花奈乃ちゃんが静かにいく練習をする。声を出したら、僕が襖を開けて、廊下に見せる」

脅しているのに、声は優しい。指は、容赦なく手前を叩き続けた。クリトリスは、もう一方の親指で潰されている。二つの点を同時に責められて、一回目が来た。浅い。なのに、膣口から愛液が噴くように溢れる。沖田さんはそれを掌で受けて、私の口へ持ってきた。

「舐めて。自分の」

舌を出すと、塩気と、自分の匂いが乗る。沖田さんは指を奥まで入れて、残った愛液を舌の上に落とす。飲み込ませる。喉が鳴る。

「次、入れるよ。昨日より深く。角度を変える」

沖田さんは袴を開いて、すでに先走りて光る亀頭を私の陰唇に擦り付けた。縦に、横に、クリトリスを亀頭で叩く。ぬるぬるした音。亀頭の裏筋が、剥き出しのクリトリスに当たるたびに、腰が跳ねる。

「おねだり。言って」

「……入れて」

「どこに、何を」

「おまんこに……沖田さんの、おちんちんを、入れてください」

「いい子。花奈乃ちゃんが、自分で言った」

亀頭が、開いた膣口を押し広げて沈む。昨日より滑らかに、根元まで。子宮口に、先が当たる。当たったまま、沖田さんは腰を円に動かした。中で、亀頭が子宮口を撫でる。突かない。擦る。私の内側が、形を変えて吸い付く。

「締めて。意識して」

膣壁を、自分の意志で絞る。沖田さんの息が、乱れた。初めて、優しい顔が少し崩れる。それが怖くて、気持ちよくて、私はもう一度絞った。

「上手。じゃあ、上」

沖田さんは私を引き起こして、座らせた。結合したまま、私の膝が沖田さんの腰の横に来る。上から、自分の重みで沈む。昨日より深い。子宮が、下から押される。沖田さんは私の尻を両手で持って、上下させた。私の胸が、沖田さんの顔の前で揺れる。乳首を、また口に含まれる。吸いながら、下から突く。

「自分で、動いて。拒否しないなら、自分で」

私は腰を上げて、落とす。亀頭が、出す直前まで抜けて、また根元まで埋まる。自分で動くたびに、クリトリスが沖田さんの腹に当たる。音が、ぱん、ぱん、と変わる。愛液が、結合部から白い泡になって腿を伝う。

「見て。花奈乃ちゃんの穴が、僕のを飲み込んで、吐き出してる」

見たくないのに、下を見る。自分の外陰唇が、赤い茎を咥えて開閉している。精液はまだ出ていないのに、愛液が糸を引いて落ちる。恥ずかしい。見られている。見ながら、自分で沈めている。

二回目が、自分の動きの途中で来た。腰が止まって、中が痙攣する。沖田さんは止まらない私の腰を、下から突き上げて、絶頂を伸ばした。伸びた波の上で、三回目が重なる。声が、喉の奥で裏返る。沖田さんはそれをキスで封じて、中で射精した。熱い。脈が多い。昨日より量が多い気がする。子宮口に、直接当たる。溢れた分が、結合部から逆流して、布団に落ちる。

「抜かない。このまま。まだ硬いよ」

本当に硬いままだった。射精したあとも、中で形が残っている。沖田さんは私を仰向けに戻して、足を肩にかけて、角度を変えた。より上を向く。手前を、茎の表面で擦り続ける。精液がぬめりになって、音が汚くなる。ぬちゃ、ぐちゅ、ぱん。

「四回目。花奈乃ちゃんの子宮口、開いてる。触らせて」

沖田さんは結合したまま、指で私の下腹部を押した。中の形が、外から分かる。押されるたびに、亀頭が子宮口に密着する。私は布団を噛んで、四回目を漏らした。長い。力が抜けて、足の指が開く。尿道まで熱くなって、透明なものが、クリトリスの下から少し噴いた。

「潮。花奈乃ちゃん、出た」

「出してない……おしっこ、じゃない……」

「知ってる。気持ちいいほう。次は、もっと出るようにする」

沖田さんは抜いて、精液の混ざった穴を指で開いた。白いものが、ゆっくり溢れる。それを舌で受けて、また中へ戻す。舌先が、子宮口の手前まで入る。熱い。柔らかい。私は膝を閉じて、閉じられない。

「今夜は、ここまで。明日の朝、また拭いて。残ってたなら、厨房で、僕が指を入れる。近藤さんの後ろで」

「入れないで……昼間は、だめです」

「だめ、は拒否。拒否なら、あの二人に言うよ」

沖田さんは私の耳に、最後のキスを置いた。優しい。なのに、言葉だけが残る。

「受け入れてるなら、明日も、襦を開けておいて。花奈乃ちゃんの穴は、もう、僕の形を覚えてる」

襦が閉まったあと、私は腿を閉じた。閉じて、中から熱が漏れ続ける。拒めば、あの二人に知られる。受け入れると、毎晩、この熱が残る。

どちらを選んでいるのか、私はもう、朝までに答えを出さなければならなかった。